



【選手紹介・敬称略】◆4列目 平川 貴稀 / 本村 仁 / 田常 大成 / 土屋 隼己 / 大土手 嵩 / 吉村 晃世 ◆3列目 牧野 光留 / 黒木 隆一 / 久嶋 弘充 / 前田 航輝 / 早田 光佑 / 木村 一騎 ◆2列目 山本 翔大 / 今西 俊介 / 田野 翼 / 上別府 希一 / 山村 凱斗 / 國分 康平 ◆1列目 松元 平河 / 福嶋 健太郎 / 田常 太一 / 廣末 卓 / 奈須 智晃 / 轟木 亜間 / 田中 智貴 / 長友 政樹 (欠席のため写っていません)



## 男子第 65 回全国高等学校駅伝競走大会 3年連続入賞 小林高等学校駅伝部

高校生ランナーの憧れ「都大路」と呼ばれる全国高等学校駅伝競走大会。小林高校駅伝部は、34人抜きの逆転劇で3年連続入賞の5位に入った。そして、新たな伝統がタスキに込められ新チームへと受け継がれる。多くの人の期待を背負い駆ける選手たちを紹介。

7	5	3	写真
8	6	4	
			1
			2

1 集団に追い付きレースの流れを変えた3区今西選手。2 競技力だけでなく人間性や礼儀を重視し指導にあたる横山監督。「監督業は難しく、奥が深い。選手たちが目標を達成できるためにはどうすればいいかに考えている」。3 主将としてチームをまとめてきた6区奈須選手。4 県外に住む出身者や保護者ら。選手が戻ってくると、大きな歓声とともに拍手を送った。5 残り 300m でスパートし後続を引き離す7区牧野選手。6 エース廣末選手。調子は万全ではない中でもさすがの走りで区間3位。7 大会前日の練習。右の先頭を走るのは、3年生で唯一の小林市出身の轟木選手。「学んできたことを活かし、大学でも競技を頑張りたい」。8 総合運動公園のクロスカントリーコースを走る選手。「毎日走るクロカンのおかげで、選手たちの力がついてきている」と横山監督。

# 小林人

こばやしびと  
Vol.48

## 驚異の「逆転劇」で見せた誇り 伝統のタスキは新チームへ

風に乗っていた。「絶対にあきらめない」といわんばかりの走りがタスキに宿り、後続の選手をも勢いづけているようだった。迎えた最終区。牧野選手は前を走る2チームを、トラックで抜き去り、タスキをゴールへ運んだ。「34人抜き」の劇的なレースだった。

横山美和監督は「悪い流れを跳ね返す走りができるのは強い証拠。本当にたくましく成長した」と選手たちを讃えた。「最初はどうかと思っただけ、入賞まで持ってくれたので良かった」とキャプテン奈須選手は、ほっとした表情を浮かべた。

伝統ある小林高校だが、平成13年から同23年の11年間、入賞できない時期が続いた。過去3大会で連続入賞しているのは、優勝した世羅高校(広島県)と小林高校のみ。結果を出し続けることがいかに難しかったか。あと一步のところまで届かなかったレースがいくつもあった」と横山監督は苦節の11年を振り返る。

その流れが変わったのが平成24年の九州大会。34年ぶりの優勝だった。「反響が大きかった。多くの人から愛されていることを改めて感じた。選手も私も、そこから練習に対する姿勢が変わった」。その年の全国大会。久々の入賞を果たした。

全国大会を走った7人のうち4人は1・2年生だ。力のある選手が残っている。「選手たちが走れるのも応援してくれる多くの人の支えがあったからこそ。チャンスの年なので、結果と言う形で恩返ししたい」と横山監督。新キャプテンの山本選手も「先輩たちの思いを受け継ぎ、絶対に優勝したい」と言葉を決めた。

選手たちは栄冠を目指しゴールへと走り始めている。目標は、37年ぶり8回目の優勝。先輩から後輩へと受け継がれてきた伝統のタスキを都大路へと繋ぐ。

1本のタスキに伝統、仲間、期待など多くの思いを乗せてつなぐ駅伝。高校生ランナーの憧れ「都大路」とも呼ばれる全国高等学校駅伝競走大会で小林高校駅伝部が3年連続入賞の5位に入った。

市民・県民の期待を背負い臨んだ今大会は、選手・監督ともに例年以上のプレッシャーがかかる大会だった。12月21日、号砲とともにレースは始まった。2区終了時点で39位と予想外の順位でのスタート。超高校級のエース廣末選手が4区に控えていたが、ケガから復帰したばかり。追い上げは厳しいだろうと思われた。しかし、選手たちは怒涛の追い上げを見せた。3区今西選手が驚異の22人抜き。廣末選手も9人を抜き8位に。5区田野選手で7位と順位を上げていく。追

